福島原子力事故関連情報アーカイブ
FNAA Fukushima Nuclear Accident Archive

Title	放射能心理学により分類されたリスクコミュニケーションの構成
Alternative_Title	Composition of classified risk communication using radiation psychology
Author(s)	大谷 浩樹(帝京大学), 千葉 菜穂美(帝京大学), 中村 友香梨(帝京大学), 宮崎 綾乃(帝京大学), 鍵谷 美稀(帝京大学) Otani, Hiroki(Teikyo Univ.); Chiba, N.(Teikyo Univ.); Nakamura, Yukari(Teikyo Univ.); Miyazaki, Ayano(Teikyo Univ.); Kagitani, Miki(Teikyo Univ.)
Citation	第 7 回環境放射能除染研究発表会要旨集, p.86 The 7th Workshop of Remediation of Radioactive Contamination in Environment
Subject	ポスターセッション : 保管貯蔵、野生生物、リスクマネージメント、リスクコミュニケーション、その他
Text Version	Publisher
URL	https://f-archive.jaea.go.jp/dspace/handle/faa/157520
Right	© 2018 Author
Notes	禁無断転載 All rights reserved. 「第 7 回環境放射能除染研究発表会要旨集」のデータであり、発表内容に変更がある場合があります。 学会は発表の機会を提供しているもので、内容に含まれる技術や研究の成果について保証しているものではないことをお断りいたします。

Japan Atomic Energy Agency

放射能心理学により分類されたリスクコミュニケーションの構成

大谷浩樹，千葉菜穂美、中村友香梨、宮崎綾乃、鍵谷美稀
帝京大学　医療技術学部　診療放射線学科

1. はじめに

放射能に関するリスクコミュニケーションは、科学者からの理論・原則だけでは成り立たない状況である。本研究の目的は、人々の精神的不安について質的分析を行うことにより得られた放射能心理学を用いて、リスクコミュニケーションの構成を行うことである。なお、本成果は2018年第1回NHK番組アーカイブス学術利用トライアルによるものである。

2. 研究方法

放射能関係のNHK番組VTR（表1）を視聴し、ナラティヴ分析を行うことで人々の放射能心理を分類した。ナラティヴ分析は質的研究として個々の経験を詳しく分析可能であり、時間経過に伴い、様々な心理的揺らぎを明らかにできるものである。また、人間同士の関係性を見ることにより、お互いの影響を分析することが可能である。本研究にでは、ナラティヴ分析の分類のうちテーマ分析を用い、人々によって語られたことにストーリー性を見出し、各センテンスにより共通性を選択した。

表1　主な視聴番組

放送日	番組タイトル
2011年11月4日 総合テレビ	特報首都圏：“科学不信“ 動き出した市民たち
2012年3月2日 総合テレビ	特報首都圏：人生、負けないで ～フラガールにもらった勇気～
2012年3月24日 総合テレビ	NHKスペシャル： 故郷（ふるさと）か移住か ～原発避難者たちの決断～
2012年8月5日 教育テレビ	ETV特集：福島のメル友へ 長崎の被爆者より
2013年7月19日 総合テレビ	ドキュメント72時間 「最後の避難所から」

3. 研究結果および考察

センテンスとして「放射能への不安」「故郷への思い」「生活の質」などに対する質的分析により不安の変化を読み取り、共通性として「状況」「対応」「不安」「効果」「隠ぺい」「不信用」があげられ、それぞれの関係性を明らかにした。各センテンスのストーリーを表2に示す。

表2　センテンスのストーリー性を起承転結で分類

	放射能への不安	故郷への思い	生活の質
起	・データ的なことで不安 ・状況から不安	・もう触れてほしくない	・町の様子がわからない ・原発勤めでは、経済面ではよいが、生活の質はわからない
承	・状況が生活に関わっている ・そこの生活で感じること	・国に対して個々の力は弱い	・ペットも生活のうち ・高齢者は家にいたい ・若年者は避難したい
転	・不安を煽らないためとして言われないことで不安は増す ・それをやられると、次に示されたことが信用できなくなる	・ご先祖、ご近所への思い	・落ち着く雰囲気じゃない ・家族がバラバラになる心配
結	・データの示し方、告知の方法によって不安が発生する ・自分で判断するべき	・もう住まないという思い ・故郷があるから強く生きていけるという思い	・避難生活と元の生活とがかけ離れている ・生活を見直さないといけないのか

同じ状況下に置かれた場合でも、自ら対応しようと考える方や漠然と不安を感じる方や隠ぺいなどを思い浮かべ信用を失っている方など様々な心理面が見られた。また、それぞれが関与して経時的な変化が現れた場合もあった。これらからリスクコミュニケーションでは、自らの考えや気持ちを伝えることにより互いの理解を得ることが重要であり、その関連性は常に変化を伴っていると考察された。

4. まとめ

リスクコミュニケーションは市民の各層が対話することであり、放射線に関する専門知識だけの説明では成り立たない。本研究で明らかにしたリスクコミュニケーションの構成は、放射能心理が変化することを質的分析により分類し、様々な感情が入り組むことを理解することである。

5. 参考文献

1) C・K・リースマン：人間科学のためのナラティヴ研究法，クオリティケア出版，2014
2) 佐藤　彰　他：ナラティブ研究の最前線，株式会社ひつじ書房，2013